

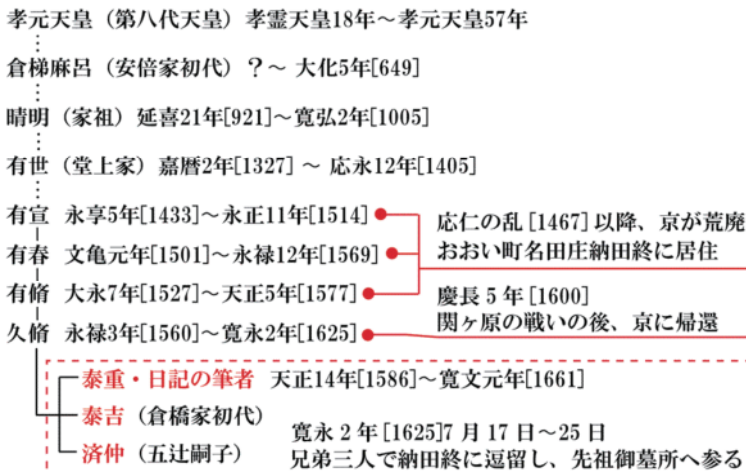
『泰重卿若州下向日記』  
から読み解く  
西の鯖街道①  
渡部康子

安倍清明の子孫である土御門安倍家は代々陰陽道をもって朝廷につかえてきた。暦の制作などが主な任務であった。30年にわたった応仁の乱(一四六七年)の戦火を避けて、領地であった今の福井県大飯郡おおい町名田庄納田終に避難。以降3代約100年に渡って居住した。

納田終には安倍家三代の墓所があり、また、その近くには陰陽道祭祀・儀式などをおこなったとされる施設と館跡が残されている。墓碑銘に刻まれているのは、陰陽宗家土御門安倍有宣(一四三三〜一五一四)有春(一五〇一〜一五九六)そして有脩(一二二七〜一五

七七)最後の墓碑は有脩の子、久脩ひさのぶ。久脩は永禄元年(一五五八年)生まれで、14歳で陰陽頭、16歳で従五位下、21歳で正五位下天文博士となった逸材である。久脩は若狭で生れ信長の天下統一と同時に京都へ帰ったと推定されるが、文禄4年(一五九五年)秀次事件に連座したものは秀吉の怒りにふれて若狭へ蟄居し、関ヶ原合戦のあと再び京都へ帰るのは慶長5年(一六〇〇年)のことである。

安倍家略系図



久脩は家康にとり入り、以後、徳川家

歴代將軍宣下には天曹てんそう地府ちふ祭を勸行するなど、朝廷以外にも武家方とも深いかわりを持ち不動の地位を築きあげた。(近藤克巳「近世陰陽道史の研究」参照)

さて件の日記はその久脩の嫡男泰重やすしげの手によるものである。納田終で生まれた泰重は14歳のとき京に帰還する。慶長5年(一六〇〇年)のことである。

それから25年後の寛永二年(一六二五年)、父久脩ひさのぶが6月18日に亡くなる。その喪にふくし、祖先の霊をなぐさめるため、泰重は兄弟2人を連れ、翌7月に京から納田終へ旅をする。

以下は宮内庁書陵部に保管されていた泰重の日記の一部である。「(株)続群書類従完成会」が本にしたものを暦会館が読みといたものがHPにのっており、それを参考に西の鯖街道との関連を考察してみる。

<http://www1.vip.ne.jp/~koyomi/rekisi/index.html>

まず、泰重らの下向をしり、納田終からありがたいとお礼に百姓彦左衛門がくる。

寛永2年(一六二五年)七月

七月十日、丙辰、晴

從若州百性(姓)二人、彦左衛門・僧一人上、御下向之由有難存之由申候て上也、種々御馳走振舞之事申付候、益目出度事、倉橋・光春院皆々呼申候、出入町人四人振舞也

『自分が下向することを知り、納田終の百姓二人、彦左衛門、僧一人』がそのお礼を述べるために上洛した。上洛した彼らにご馳走を振る舞うよう命じた。盆は目出たい事だ。倉橋や光春院達を家に招いた。出入りの町人四人にも振舞った。』(『内は暦会館の訳』)

◆「彦左衛門」は7月22日・11月11日の日記にも登場する納田終の実力者

そして泰重は土産を用意している帷子は麻の一重の着物、皮躰は皮の足袋ことか、扇も100本買っている。退屈は古語でうんざりするの意味。

七月十一日、丁巳、晴

若州者今日下申候、兵糧申付遣候、盆用意共申付候、若州下用意、帯帷子七、

帯十五筋、皮踏廿三、扇子百本、用二季算用良子過分相渡、」方々かけ共也、退屈申候、

『昨日上洛した納田終の者達が帰郷した。彼らに食料を持たせた。盆の用意、旅先で振舞う金品の用意をする。帯帷子七、帯十五筋、皮踏廿三、扇子百本、用二季算用銀子。方々と掛け合った。あとは退屈した。』

七月十二日、戊午、晴、

亡妻命日、林太来、相伴、用意事外取紛申候、御経巻書付など仕候、若州下申候、五輪見に参候て、調銘共切セ申候、駄質(質)馬三疋分良子廿七匁相渡也、

『亡妻の命日。林太が来て相伴する。用意が事の外、取り紛れた。御経の巻書付等をした。若州に運ぶ五輪塔を見に行った。調銘を彫るよう命じた。その五輪塔の運搬費用馬三頭分として銀子二十七匁を支払った。』

七月十三日、己未、晴、

見廻衆来候、助左衛門八木三斗遣候、

『見廻衆がやつてきた。助左衛門に米三斗を与えた。』

七月十四日、庚申、晴、

盆、将来まつる也、如常、午前林太来候、経よミ焼香「己と十一」、酒進、布施鳥目二百遣候、晚倉橋参、及雞鳴庚申待帰宅也、

『盆だ。蘇民将来を祀る。いつもの通り、林太が来て御経を読み、焼香を終えた後、お酒を進めた。お布施代として二百与えた。晩には倉橋が来た、一緒に庚申待で夜を明かし、帰宅した。』

宴会のさかながおもしろい。強飯はたかずに蒸した米、鯖すハりは細くさいた鯖の身をほしたものらしい。奈良時代の献上物として出土している木簡には多比楚割すはりなどが多くみられる。またキジなどの鳥肉も楚割すはりにしたという。今の若狭には残っていない。鯖すハりはどんな食味であったのであろう。ちなみにロシアにもスハリという食べ物があり、それは味付けたパンをカリカリに干したものらしい。

七月十五日、辛酉、晴、

将来まつる也、飯後礼者有之也、倉橋御出、強飯・鯖すハリ(楚割)、祝義酒盃如常、明日罷立用意、道具共つゝらに入、人共支度申付候、五輪つゝ三用意、午下刻大雨降也、

『蘇民将来を祭る。食事の後、礼者が来た。倉橋が来て、強飯・鯖の楚割、祝儀の酒杯はいつも通り。明日の旅立ちの用意、旅道具等を葛籠に入れる。また、召使達にも、旅支度をするように命じた。五輪塔も運搬するため梱包した。昼過ぎ大雨が降る。』

七月十六日、壬戌、晴、

若州へ下向申候、蓮臺野通、長坂越也、三人同道、今宿宮脇ト云所泊申候、川勝七右衛門案内者也、今日路次山坂事外嶮難驚申候、

『若州(納田終)に旅立つ。蓮台野通り、長坂越えだ。三人同道だ。宮脇という宿場町で一泊した。川勝七右衛門が案内してくれた。今日の行程がとても険しいものだった。』

いよいよ出発だ。蓮台野は今の千本鞍馬口あたり、そこから鷹峯―千束―長坂越で京見峠を越えている。おそろくルートは 杉坂―真弓―縁坂峠―大森―茶吞峠をこえて稻荷谷から縄野坂を越えて周山に出て、五本松―漆(谷峠―佐々江―神楽坂(葛坂)―原―宮脇と考えられる。これは西の鯖街道協議会で作ったトレイルマップと同じルートだ。「今日の路は山坂事の外険しく難儀であり驚き申し候」とあるが、40キロ以上を1日で歩いたことになる。それはやはり険しく難しい旅であったろう。未明にでて1日10時間以上歩いたことと思う。

宮脇の旧道には今でも宿場の雰囲気を感じさせる家並みがある。翌深夜に宮脇を立つた一行は和泉―静原―鶴ヶ岡―田土―林―大及おおきと進んだに違いない。これもトレイルマップとまったく同じルートである。納田終から一里半ほどいったところで出迎えのものにあつたとの記述があるが、出会ったのは大及であろう。大及は廢村になりわずかに石垣を残すのみだが、江戸時代は鶴ヶ岡以上のにぎわいであつたというところが、次の記述から想像される。小浜街道を行く旅人と高浜街道を行く人が交差する大及は果てではなく、交差点であつたのだ。ルートはおそらく堀越峠をこえたに違いない。

七月十七日、癸亥、晴、

丑刻罷立、午後のたをひに付申候、一里半ほど迎出申候、十町十五町ほど百性(姓)百人不残罷出申候、事外存之外、馳走躰殊勝千万之事也、鍛冶屋と申百性(姓)所へ付申候、打付振舞申候、出家共礼来候、明日在所中とき振舞可申候由申候、

申候、とり井木山より切て 百性(姓)共来、あらとり百性(姓)共仕候、事外達者なる躰、事外忝かり、地下中女男老若共 頭傾有難之由申候て おかミ、たつ拜、存之外あかめやう驚、召使者共驚申候、ひし(非時)にも僧六人來、相伴也、

『午前2時頃宮脇を發ち、午後に納田終に着く。6キロ程手前で迎えの者がいた。沿道には1キロ程にわたり百姓100人・村総出で出迎えてくれた。思いがけない歓迎だ。心を打たれた。鍛冶屋という百姓所に着いた。すぐに振舞った。出家共が礼に來た。明日は皆に振舞うと伝えた。』

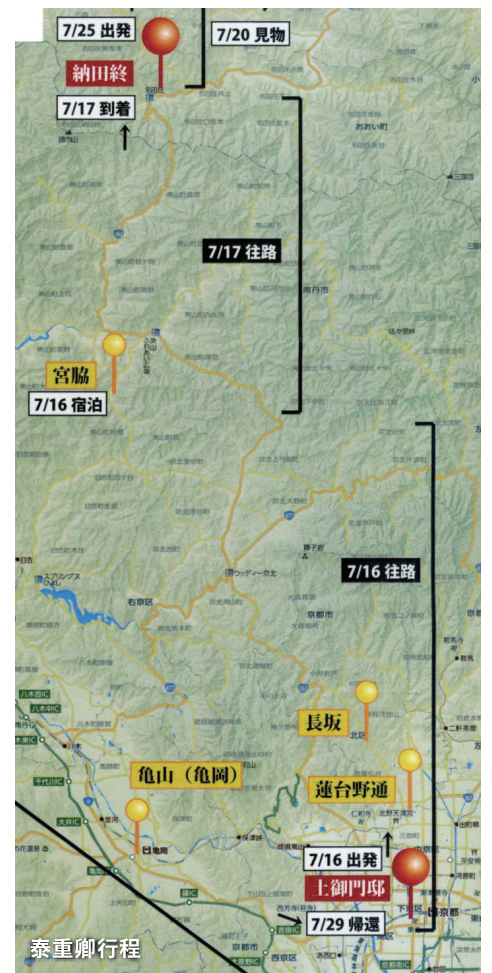
七月十八日、甲子、晴、

出家六人、地下老寄分十八人、一座二居申候、残百性(姓)男女共四百人ほど別之家にて用意仕、振舞仕候、御酒を八見所にてのませ可申候由申候て、男分百廿人ほとに、座敷三行二双、酒のミ申候、汁器にて三盃、二盃四盃五盃のも四分一あるへし、驚耳目候大酒也、馬樽五つのミあけ申候、先祖御墓所一段上方 地筑 石牆に 仕なをさせ

『僧6人・有力者18人は同じ家で、別の家では百姓男女400人程にご馳走を用意して振る舞った。特に男120人には見所でお酒を振る舞った。相向かいで三列に座った。百姓の酒杯は汁器。まずは皆で(そこそこ統率のとれた形で)三杯飲み干した。後は二杯、四杯と飲み、五杯飲み干す者は全体の四分の一に達していた。馬樽五つ飲み空けてしまったのには驚かされた。それから先祖御墓所の改修を百姓たちにさせた。今の位置より少し上方に築地して石垣を積み直した。そして、(玉垣をするために)「とり井木山」より木を切り出し作った。要領のよい働きぶりだ。墓所改修が終



薬師堂



泰重卿行程

えた後、地下の女男老若は、頭を傾け「有難い」と言つて拝礼している。意外と信仰厚い、また作法を知っている。地下の者たちに、召使達も驚いている。非時(精進料理)を僧六人と相伴した。◆「ひし(非時)」「精進」「つとめ」は、納田終逗留中・旅行中の日記によくでてくる言葉。

七月十九日、乙丑、晴、

二位殿(有春)命日、靈供二備、僧六人來候、つとめ過とき相伴申候、薬師堂参納涼、終日くらし申候、ひし(非時)六人相伴、さとう(座頭)來候、

『二位殿(有春)の命日、お供え二膳。僧六人が来て、勤行を終えて相伴した。納涼のため納田終薬師堂で終日過ご



安倍家墓所

した。ひしを(先ほどの)僧六人と相伴した。座頭がきた。この後泰重卿は高浜へいき、田辺(東舞鶴)から宮津を観光し、綾部を経由して亀岡から京にもどっている。後半の旅は次号へ続く